

## 台湾現代文学のなかの「鬼」の形象

——陳思宏『亡霊の地』と台湾における鬼月の観察を手がかりに——

三須祐介

### I はじめに

「人間と人間でないもの（ノンヒューマン）の相互作用」という連続講座全体のテーマを、台湾文化という文脈で考えてみると、中国語では「鬼 gui」と表記される幽霊や妖怪の表象が思い浮かぶ。これらは、台湾というよりも中華圏全体に見られる普遍的な文化といえるが、2010年代以降、台湾独自の文脈においても注目されつつある<sup>1)</sup>。

そこで連続講座の第一回目は「台湾の「妖怪」と「幽霊」—文学と歴史、アイデンティティをめぐって」というテーマとし、三須祐介「台湾現代文学における「鬼」の形象—陳思宏『鬼地方』<sup>2)</sup>を手がかりに」、台湾現代文学研究者で翻訳家の倉本知明氏（文藻外語大学）「台湾現代文学における「魔神仔」の形象—怪奇譚が生み出すナショナル・アイデンティティ」の二本の報告、そしてコメンテーターに民俗学者の菊地暁氏（京都大学）を迎えて構成した。

本報告は、筆者が準備中に陳思宏『亡霊の地（原題：鬼地方）』という小説を翻訳していたことが大きな契機になっている。原題に「鬼」が入っていることからわかるように、作品の中には死者が幽霊となって語る場面もあり、「鬼」の小説ともいえる。一方で「鬼地方」には「ろくでもない場所」という含意もあり、ゲイである主人公の出身地である台湾の片田舎を戯画的に描いており、その点ではダブルミーニングのタイトルといえるが、詳細は後述する。また、報告者は2022年7月から9月半ばまで台湾に滞在できたため、滞在中に実施した「鬼」にまつわる現地調査も交えて報告としたい。

### II 「鬼」とはなにか？「鬼月」とはなにか？

中国語で「鬼」は「gui（グイ）」と発音し、実にさまざまな意味を持っている。小学館／北京・商務印書館『中日辞典』（第二版、2003年）によれば、1「幽霊、亡霊」、2「悪い行為や悪癖をもつ者に対する蔑称に用いる」、3「子供への愛称に用いる」、4「こそこそした：陰険である」、5「悪たくみ：うしろめたいこと」、6「劣悪な、悪い、ひどい」、7「〈口〉利口である、賢い：すばしこい」、8「（二十八宿の一つ）たまおの、たまほめ」といった意味が列挙されている。また、水鬼（水辺の幽霊）、厲鬼（強い怨恨を持った幽霊）、酒鬼（酔っ払い）など、幽霊に限定されない形で「鬼」にまつわるさまざまな語彙も使われている。

さらに中華文化圏では旧暦の七月は「鬼月」、すなわち「幽霊の月」とされている。旧暦七月一日に、あの世とこの世を繋ぐ鬼門（墓門ともいう）が開き、亡くなった方、幽霊や亡霊が出てくる。そして出てきた幽霊や亡霊を迎えて祀ることを「拝拝（パイパイ）」という。「鬼月」は中国の三元信仰に基づく道教の祭日である中元節（旧暦七月十五日）を含んでおり、中元では地官を祀る贖罪の日とされ、道士が亡魂を済度した。これが後に仏教の盂蘭盆会と結びついて、祖先礼拝と身寄りのない亡霊の済度（普度）を行うようになった。台湾でも多くの廟で普度と言われる亡くなった方の済度の儀式が行われるが、家庭や店舗でも供物を準備し、焼香し、紙銭を燃やし礼拝するといった「拝拝（パイパイ）」が行われる。

「鬼月」にはいけない禁忌、タブーもあり、たとえば「鬼」と言わず「好兄弟（ハオシオンディ）」と言わなければならない。「好兄弟」とは兄弟のように仲の良い、家族のような相棒という意味合いがあり、そのように親しみを込めて呼称することで鬼や幽霊との衝突を避けるということがあるようだ。

なぜ女性ではなく男性を示す語なのかというのはさまざまな議論があるようだ。台湾というのはもともと移民社会で、16世紀ごろから漢人が福建省を中心とした中国南部から渡ってきた。現在原住民族と呼ばれる人々が居住していたところに、漢人が移民としてやってきたのである。彼らは「羅漢脚」、つまり単身者として身寄りのないまま亡くなり、いわゆる「無縁仏」になることが多かったことが「好兄弟」の呼称に繋がっているとする説もある<sup>3)</sup>。

それから、水辺に行ってはいけないという禁忌もある。水辺は水の幽霊である「水鬼」がおり水中に引き込まれてしまうとされているからだ<sup>4)</sup>。他にも引っ越しや家屋の建築、結婚もタブーとされている。

### Ⅲ 台湾における「鬼月」の観察

#### 1 鬼門を開く儀式

2022年7月29日（旧暦七月一日）、台北駅からメトロで15分ほど北に行った「芝山」という駅から芝山巖という小高い丘を目指した。芝山巖の上には恵濟宮という道教、仏教、儒教が混雑した廟がある。福建省漳州からの移民によって造られたとされ、彼らの守護神が祭られている。この廟から少し離れた敷地内に無縁仏の墓所である「同歸所」がある。中国南部あるいは沖縄地方にもよく見られる亀甲型の墓だ。

鬼門を開く儀式は、釋教という民間の土着の宗教に基づいて行われた。僧衣を着た釋教の僧侶が墓所に正対して儀式を進行する。墓所と僧侶の間には大きな供物台が置かれ、供物や紙銭が置かれている。僧侶は手に鐘を持って鳴らしながら読経をし、傍らの炉では係が絶えず紙銭を燃やし続ける。その後おもむろに僧侶が墓所の脇から上に登り、墓所の上部にある鬼門（小さな蓋のようなもの）をずらす。これが鬼門を開く儀式である。

#### 2 燃放河灯（灯籠流し）

2022年8月18日（旧暦七月二十一日）、台北駅からメトロで北上し、終点の淡水駅へと向かった。「燃放河灯」という灯籠流しの儀式を見るためである。淡水は淡水河の河口にあたる台北北

部近郊の港町であり、美しい夕陽で有名な街である。そこに福佑宮という廟があり、航海などを司る女神・媽祖が祀られている。反清復明を目指して台湾に渡来した明の遺臣によって1782年に造られたと言われている。儀式はこの福佑宮を中心として行われたが、この実現には淡水南北軒という北管の団体の貢献が大きい。北管とは中国の戯曲（伝統演劇）由来の伝統的な音楽のことであり、宗教祭祀などではその演奏が欠かせない。今回はその淡水南北軒のメンバーが関係各機関に働きかけ、日本時代にあったという儀式を中元節の風習として復活させようという試みであった。

まず、淡水南北軒から儀式に使う道具を福佑宮に運び、廟の奥で精進料理をいただいた後、廟の前で北管の演奏を行った。近くでは仏教の関係者が別に読経を行っていて、夕方、日没が近づいたところに、仏教の関係者も合流して淡水の街を練り歩きながら淡水河の河口にたどり着いた。チャーター船には灯籠を持った関係者と淡水南北軒のメンバーが乗り込み、演奏をしながら灯籠流しの地点まで移動すると、賑やかな北管の演奏のなかで、ひとつひとつ灯籠を沖の方へと流していった。この儀式には故人を悼むと同時に、とりわけ水難事故で亡くなった靈魂や無縁仏を普度するという意味が込められているという。儀式が終わると岸に戻り下船するころにはすでに陽は落ち暗くなっていた。一行は福佑宮に戻り再び北管の演奏を行って全行程が終了した。

### 3 街の状況

鬼月の期間中には、スーパーマーケットなどに中元節用の特設コーナーが設けられ、菓子やインスタント麺、果物といった供物の他、紙銭、紙銭を燃やす炉が売られていた。

街なかでは、各種店舗や家屋の前に供物台と炉が置かれており、実際に「拝拝」が行われている状況に出くわすこともあった。もちろん、各廟でも状況は同じであり、まさに街中が中元節あるいは鬼月の雰囲気包まれているという状況であった。

### 4 「アジアにおける地獄と幽霊展」

これは「鬼月」に合わせたと思われる台南市美術館2館の企画展示である（会期：2022年6月25日～10月16日）。展示タイトルにもあるように台湾、日本、東南アジアなどを含むアジア各地の資料が展示されていたが、美術館であるためか歴史的な博物資料だけでなく現代作家の作品も少なからず含まれていた。

その中でも興味深かったのは台湾映画のポスターである。ひとつは、1988年の台湾映画『林投姐』（丁善璽監督）だ。林投というのは常緑樹のタコノキのことであるが、清朝末期に台南に住んでいた女性が怨霊となって、彼女から財産を奪い家族を死に追いやった男に復讐する女幽霊の話である。伝説では女性はタコノキで自死したとされているが、映画では夫に殺害されてタコノキに吊るされるという改編が行われている<sup>5)</sup>。

もうひとつは1977年の台湾映画『紅顔・情絶・女幽霊』（李家志監督）で、「周成過台湾」という物語を改変したものである。清末に福建に妻子を置いたまま新天地を求めて台湾にやってきた男（単身で渡来する「羅漢脚」の典型）が財を成して妓女と結婚し、大陸に置いてきた妻子のことを忘れてしまう。妻が台湾にやってくると男は妻を毒殺するが、彼女は怨霊になって

男に取りついて、彼が新たに娶った妓女を呪い殺し、男も自殺させてしまうという物語である<sup>6)</sup>。両作品ともに女幽霊（女鬼）の話であることが非常に興味深い。

## 5 映画『民雄鬼屋』（劉邦耀監督、台湾、2022）

これは「鬼月」のシーズンに上映されることが多い幽霊もののホラー映画作品といえ、2022年の台湾で話題になった映画である。台湾南部の嘉義にある民雄という地区の劉氏旧宅がモデルになっている。劉氏旧宅は今でも幽霊屋敷として有名で、日本時代に兵士が誤射して味方を射殺した、かつて女性の使用人が井戸に投身自殺したといった、血塗られたエピソードがある場所である。

映画では女性主人公が、男尊女卑の伝統的な観念によって子どもの頃から家族から虐待され、救済を名目に宗教者によって性暴力を受ける。女性は最終的には井戸に落ちて死に、幽霊となって現れるというプロットだ。流血などの陰惨なシーンも多いが、怨念を抱く幽霊になる理由がはっきりと描かれているため、得体のしれない恐怖に満ちた映画とは言えず、ホラー映画としてよりもむしろ女性映画として分析する価値のある作品といえよう。

## Ⅳ 陳思宏と小説『亡霊の地』

陳思宏は1976年生まれ、台湾彰化県永靖郷の出身である。輔仁大学、台湾大学大学院を卒業後、現在はドイツのベルリンに住み作家活動をしている。すでに多くの小説やエッセイを刊行しており、邦訳には「べちゃんこないびつな まっすぐな」という短篇がある<sup>7)</sup>。

陳思宏は、台湾では「同志文学」といわれるセクシュアル・マイノリティが表象された小説の書き手のひとりにも数えられており、拙訳『亡霊の地（原題：鬼地方）』（早川書房、2023年5月）の主人公もゲイである。作家の出身地である永靖郷と家族を描いた「夏日」三部作の一作目である『亡霊の地』の原著は2019年に鏡文学より刊行され、2020年の台湾文学金典賞年度百万大賞、金鼎賞文学図書賞などを受賞している。主人公のゲイを含む陳家の七人きょうだいとその両親、祖父母、彼らを取り巻く隣人たちが登場し、故郷である永靖郷と、主人公が故郷を捨ててたどり着いたドイツが物語の空間として機能している。物語の時間軸は、過去と現在を行きつ戻りつするが、ドイツで事件を起こし収監された主人公が出所後、故郷に帰ってきた日（中元節）が物語の現在になるように設定されている。

物語のポイントとして、一点目は「幽霊の存在」が挙げられる。主人公の父親は病死、主人公の五番目の姉（五女）は自死し、ともに幽霊となって登場する。父親は残された家族を穏やかに見つめる存在として出てくるが、五女は婚約者に捨てられ自死し、死後もその怨みを抱き続ける。他に、日本時代に男性に凌辱されて自死した女の伝説も登場し、怨恨を抱きつつ死んだ女幽霊の系譜がここにも存在していることは興味深い。

二点目は「白色テロの影と同性愛」である。白色テロとは、戦後台湾の戒厳令下において国民党政府が行った知識人や反体制派への弾圧である。作品では、陳家の次姉が高校生の頃に通った故郷の数少ない書店「明日書局」で行われた読書会が弾圧の舞台となった。書店のふたりの店主はゲイカップルであり、読書会に参加していた近所の王家の次男は主人公が最初に恋した

同性となった。次男は台湾大学を卒業後就職もせずに故郷に戻り、スターフルーツを育てながら読書会に参加し、警察に指名手配されついには変死（自殺？）してしまう。ただし幽霊となって登場することはない。

三点目は「犯罪企業といびつな性」である。王家の父親は、陳家の父親といっしょに商売を始め、中国に進出して大金持ちとなる。長男は美しい陳家の五女と婚約するが、性的な理由で彼女を捨て四女に鞍替えする。王家の長男のいびつな性的欲望は、五女を自死に追いやり、四女は精神崩壊も促してしまう。四女の形象はさながら「生霊」のようである。この王家は、永靖を本拠地とする企業グループである頂新国際グループをモデルにしていると思われる。小規模な油脂メーカーからスタートし、1989年には中国に進出、傘下企業には中国の即席麺で有名な康師傅や食品メーカーの味全などがある。事業の多くは中国で展開し、日本企業とも提携してきたが、2014年に廃油を原料とした不祥事が発覚して、社会問題化した<sup>8)</sup>。

このように『亡霊の地』には、台湾の現代史を背景にしつつ、永靖という田舎町を軸に、中国大陆やドイツにまで物語の空間を拡大しながら、人間と死者（鬼／幽霊）とのコミュニケーションとコミュニケーション不全が描かれていると言えるだろう。

## V 台湾の文芸作品と「女鬼」

本節では台湾の文芸作品と女の幽霊、「女鬼」について考えてみたい<sup>9)</sup>。台湾の物語において男の幽霊がいないわけではないが、既に述べたように「女鬼」の形象が際立っている。

前節において『亡霊の地』における日本時代の女幽霊のエピソードに触れたが、これは主人公の曾祖母を指している。彼女は日本時代に日本兵に凌辱され、それが原因で婚家にも見放されて竹林で自殺する。そして竹林の首つり女の幽霊として恐れられるのである。男に裏切られて首つり自殺するといえ、上述した映画『林投姐』すなわちタコノキ姉さんと重なるイメージである。

厳密には台湾文芸作品とは言えないが、佐藤春夫「女誠扇綺譚」（1925年）も「女鬼」を考える上で重要な作品である<sup>10)</sup>。台南の海辺を日本人記者と台湾人、二人の男が歩いている。すると廃屋から「なぜもっと早くいらっしやらないの」と女の幽霊のような声が聞こえてくる。しかし本当に幽霊なのかどうか分からず、確定できない。この正体が何かわからないという謎めいたナラティブが「女誠扇綺譚」の恐怖をさらに強化する。没落した富家の娘が死後も婚約者の男を待ち続けているらしいということも語られることから、怨念を抱く「女鬼」の典型的なパターンと言えるかもしれない。そして、男が女の幽霊に出会う（殺される）というシチュエーションも典型的と言えるかもしれない。

また、李昂という女性作家の小説にも興味深い幽霊の話が出てくる。ここでは二篇の作品を紹介したい<sup>11)</sup>。

「谷の幽霊（おに）」（2004）は、清代に原住民の女性が奪われた土地を請求すると逆に性的に凌辱されて殺され、幽霊となって日本時代や戦後を自由自在に渡り歩き、最終的には成仏するという物語である。それほど恐怖を煽る内容にはなっていないが、幽霊が自由自在に台湾の歴史を俯瞰していくという点が非常に特徴的である。ただ、最初の幽霊になるきっかけになった



のが性的に凌辱され殺されるということであり、この点は「女鬼」を考える上で重要であろう。

「海峡を渡る幽霊」(2004)は、無念を抱いた女幽霊が大陸から海峡を越えて、台湾に逃げた漢方医を追いかけていき、過去の恨みつらみを言い募るが、神の采配で漢方医の子を養子にすることで、女幽霊は姿を消すという物語である。大陸から台湾へ渡来してきた人々と幽霊、あるいは女の怨念が結びつく典型的な物語と言えるだろう。

Ⅲにおいて映画『民雄鬼屋』にも「女鬼」が登場することを紹介したが、2022年に日本でも公開された『紅い服の少女 第一章神隠し 第二章真実』(程偉豪監督、台湾、2015/2017)という映画についても触れたい。

不慮の事故死を遂げたわが子をよみがえらせることに執着した母親によって幽霊として復活するのが「紅い服の少女」であるが、それは(女)幽霊でもあり妖怪的でもあるような存在として顕現し、台湾の代表的な妖怪である「魔神仔(モシナ)」の形象に繋がっている<sup>12)</sup>。ここでは、幽霊(亡霊)と妖怪の境界が不分明という点が興味深いところであるが、例えば中国語の「鬼怪」は幽霊と妖怪を区別しにくいひとつのまとまりと見なす概念を表しており、幽霊と妖怪はそもそもはっきりとは分けにくいかもしれない<sup>13)</sup>。この映画でも、性暴力、妊娠、母娘の関係性が色濃く描写されており、その意味でも、『民雄鬼屋』のようにホラー映画というより女性映画という角度からの分析も有効だろう。

以上のように、「女鬼(女幽霊)」の表象を台湾文芸作品のなかに見出すことは比較的容易である。台湾文化における「女鬼」のイメージについては台湾でも研究されており、陳秀華は次のように述べている。

伝統的な時代には社会の弱者であった女性は、家庭や夫、子が中心のなかで負担は重く複雑なものであった。台湾はかつて移民社会で、生活物資が欠乏した時代に大陸から男性が渡台し、台湾の女性に詐欺や、誘拐、瞞着を行ったあげく、ついには捨てて中国へと帰っていくことが往々にしてあった。被害女性はこのような事実を受け止め難く、多くが自殺することとでその一切から逃れようとしたのである。<sup>14)</sup>

大陸から台湾へやってきた漢人の歴史を背景に、男性を中心とした歴史叙述からは零れ落ちるようにして生まれた「女鬼」の形象は、現代にも続く女性の問題と響き合いながら、数多くの文芸作品のなか存在していると言えるのだろう。

## Ⅵ 怨念とアイデンティティ

「女鬼」の形象がしばしば「怨念」と分かちがたいことを前節でも述べたが、最後に、怨念とアイデンティティの問題について触れておきたい。

台湾には全聯というスーパーマーケットがある。全国にチェーン展開しており、毎年中元節に合わせてCMを制作している。2018年のCMは、あの世からやってきた亡霊が登場し、供物を準備し拝拝(パイパイ)してくれる現世の人々に感謝するという内容であった。登場人物が何者なのかは明らかにされなかったが、白色テロの被害者三名がモデルなのではないかとネッ

ト上で話題になった。全聯はただちにCM動画を削除したが、その後三日間のみ再掲したのちに再度削除を行った<sup>15)</sup>。

そのうちの一人は日本語を話す女性で子どもを連れている。このモデルではないかとされたのが丁窈窕（1927 - 1956）という女性である。彼女は日本時代の台南に生まれ、台南州立第二高等女学校を卒業、台南郵便局に勤務した。丁窈窕は特務機関が報奨金目当てにでっちあげた「台南郵電支部案」に巻き込まれ、1954年に逮捕され、56年7月24日に銃殺刑に処された<sup>16)</sup>。獄中で生まれた娘が残されたとされ、これもCMの状況と酷似している。CMの登場人物は「面識もない私たちのために、こんなふうによくしてくださって、ほんとうに優しいなあって思いました。何度も泣きたくなりました」と日本語で話している。

二人目は藤椅子に座る老人であり、訛りの強い中国語で供物を捧げてくれる人々に感謝を述べている。モデルとされているのは思想家の殷海光（1919-1969）である<sup>17)</sup>。彼は民国期の中国湖北省で生まれ、西南聯合大学、清華大学哲学研究所で学び、1949年に渡台し台湾大学哲学系で教鞭をとった。戒厳令下で自由主義思想の立場から国民党を批判し、逮捕や投獄はされなかったものの、著作の禁書指定、補助金の停止など政府側からの妨害工作を受けた。

三人目は猫を抱えた青年が、台湾語で感謝の意を述べるというものである。このモデルではないかとされたのが陳文成（1950-1981）である<sup>18)</sup>。彼は米国カーネギーメロン大学の数学教師で、米国滞在中に台湾の党外雑誌『美麗島』を支援していた。「党外」とは国民党から見れば非法な政治活動、言い換えれば国民党政権を批判して民主化を進めようとした人々や組織を指しており、後の民主進歩党のメンバーとなった人々も多く含まれる。1981年に台湾に一時帰国中に警察に呼び出され、台湾大学のキャンパス内で遺体となって発見された。遺体には自白を強要された際の傷痕が残されていたとされ他殺の可能性もあったが、警察は他殺を認めず自殺が事故として処理をした。

ネット上では「移行期の正義」の表れではないかと肯定的にとらえる意見もあった。「移行期の正義」とは、その社会で起きた大規模な人権侵害を、政権交代などを契機にして、社会がそれと向き合い対処しようとすることである。

すなわち、国民党による戒厳体制下において弾圧された人たちが鬼月に幽霊として登場し供養に感謝すること、そして現在の台湾の住民が彼らを迎え入れて供物を捧げ供養すること、このようなCM全体の文脈のなかに「怨念を晴らそうとする台湾人アイデンティティ」の構造を読み取ることができるということではないだろうか。1987年の戒厳令解除から30年以上が経過し省籍矛盾（外省人と本省人の対立）だけで台湾社会や政治の問題を単純化して理解することはもはやできないが、歴史に向き合い忘却に抵抗するということは変わらずに必要であり重要な問題である。殷海光と思われる老人の「自分のことはもうみんな忘れてしまっているかと思っていた」という言葉がそのことを如実に表している。

最後に、小説の話に戻るが、小説における同性愛者の幽霊の登場もアイデンティティの問題と関わるかもしれない。

例えば、『亡霊の地』に幽霊として出てくる父は王家の次男と同性愛的な関係を結んでいた。郭強生の小説『惑郷の人』<sup>19)</sup>にも、自殺するゲイの少年が幽霊として登場する。そして幽霊として自分のゲイ・アイデンティティを受け入れるというようなシーンもある。つまり、彼自身

が性的アイデンティティの葛藤から解脱する仕掛けが幽霊を通じて可視化されているのではないだろうか。

政治的アイデンティティの場合には、幽霊になることで他者との関係性における「怨念」が晴らされるが、性的アイデンティティの場合には、幽霊になることで自己の内部にある「葛藤」から解放されるとすれば、両者の構造は相似を成しているといえるのかもしれない。

## 注

- 1) 例えば、最近刊行されたものでは、台湾各地の妖怪伝説を事典風にまとめた何敬堯著、甄易言訳『[図説] 台湾の妖怪伝説』（原書房，2022：原書『妖怪臺灣地圖：環島搜妖探奇録』聯經，2019）があり、また押野武志・吉田司雄・陳國偉・涂銘宏編著『交差する日台戦後サブカルチャー史』（北海道大学出版会，2022）には、「妖怪から見る現代台湾ミステリの社会的位置づけ」という論考が収録され、台湾における妖怪の表象の社会的文脈を論じている（この点についてのより詳しい分析は、倉本氏の論考を参照されたい）。さらに、人類学の視点から台湾における「鬼」や「神」の信仰の現在とそこに見え隠れする「日本」の影を読み解く三尾裕子編著『台湾で日本人を祀る』（慶応義塾大学出版会，2022）も参照されたい。
- 2) 本書は台湾の鏡文学から2019年に刊行された。詳細は第IV章を参照。
- 3) 「きょうのキーワード（2021-09-03）「好兄弟」：無縁仏を兄弟扱い？」中央廣播電臺ウェブサイト <https://jp.rti.org.tw/radio/programMessagePlayer/programId/1562/id/62365>
- 4) 片岡巖『台湾風俗誌』（台湾日日新報社，1921年；いま【影印版】青史社，1983年）によると、「水鬼とは水難にて死せしもの、魂魄にして、水中に潜んで人を誘ひ溺れしむるものなりと云ふ」（520頁）とある。
- 5) 前掲『台湾風俗誌』にも「林投姉」として紹介されている（864頁）。
- 6) 報告では陳翼青監督の『鬼恋』を民国期中国の徐訏の小説作品『鬼恋』を下敷きにしたものであり、幽霊だと名乗る女性に恋をしてしまう男の物語で、幽霊の話ではないと紹介したが、再調査したところ、徐訏作品を原作にしたものではないようである。ポスターを詳しく調べると、自分を横恋慕する男に殺された恋人を追って投身自殺した女性の話であるが、更なる調査が必要である。
- 7) 呉佩珍・白水紀子・山口守編、三須祐介訳『短篇小説集 プールサイド』台湾文学ブックカフェ3、作品社，2022所収。
- 8) 「頂新グループとは」日経新聞オンライン，2019年5月21日。<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO45045790Q9A520C1FFE000/>
- 9) 本節で取りあげる作品やそれ以外の作品について、赤松美和子「冗舌に語り始めた台湾文学100年の幽霊たち：複雑な歴史と文化を体現する存在」ニッポンドットコム <https://www.nippon.com/ja/japan-topics/c11301/> を参照されたい。
- 10) ここでは佐藤春夫『佐藤春夫台湾小説集 女誠扇綺譚』（中央公論社，2020年）を参照した。
- 11) 李昂著、藤井省三訳『海峡を渡る幽霊』（白水社，2018年）に収録されている。
- 12) 「魔神仔」については倉本氏の論考を参照されたい。
- 13) この点は後述するスーパーマーケットチェーンの全聯の2022年の中元節CMにおいて、「魔神仔」が登場したことも繋がっているだろう。すなわち中元節の祭祀の対象に「魔神仔」も含まれるということである。また、「魔神仔」は子どもの形象をしていると言われており、「紅い服の少女」と親和性が高いとも言えよう。
- 14) 陳秀華『臺灣女鬼 民俗學裡的女鬼意象』東販出版，2018年，32～33頁。
- 15) この経緯については、たとえばニュースサイトBBC NEWS 中文「發鬼財搭錯車？台灣商家中元節廣告影射政治受難者引爭議」（2018年8月9日）によれば、会社側は「感謝と追懷の価値観を示したものだ」



とし、モデルが白色テロと関係しているかについては明言せず、混乱を避けるために三日後に削除することにしたという。<https://www.bbc.com/zhongwen/trad/chinese-news-45128617>

- 16) 林志鴻「歴史上の今天：丁竊窺，施水環受難日」新台湾和平基金会 <http://www.twpeace.org.tw/wordpress/?p=2084>
- 17) 殷海光については、殷海光基金会ウェブサイト ([http://www.yin.org.tw/about\\_yin.html](http://www.yin.org.tw/about_yin.html)) に詳しい。殷を含む台湾民主化運動の概略については周婉窺著、濱島敦俊監訳『増補版 図説台湾の歴史』（平凡社、2013 年；原著は 2009 年）戦後篇第 4 章に詳しい。
- 18) 陳文成については財団法人陳文成博士紀念基金会ウェブサイト [http://www.cwcmf.org.tw/joomla/index.php?option=com\\_content&task=category&sectionid=8&id=59&Itemid=376](http://www.cwcmf.org.tw/joomla/index.php?option=com_content&task=category&sectionid=8&id=59&Itemid=376) に詳しい。
- 19) 西村正男訳、あるむ、2018 年。原著は『惑郷之人』聯合文学、2012 年。

